

森林の路網 地図で支援

県森林研が発表

県森林研究所(美濃市)の研究発表会が12日、関市のわかさ・プラザで開かれ、県内の林業関係者を中心に約120人が参加した。口頭で4人、ポスターで9人の計13人がこれまでの研究成果を発表した。

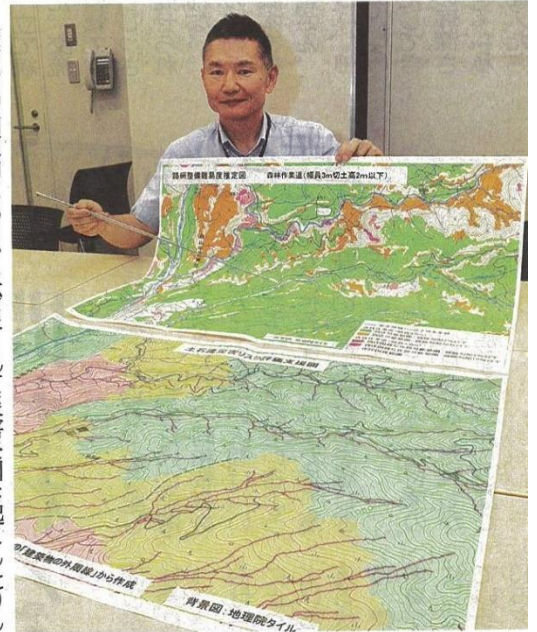
森林資源部の白田寿生主任専門研究員は「災害に強い路網整備を支援する地図の開発」と題し、開発した災害リスクに対応した二つの地図を紹介。壊れにくい路網整備がしやすい場所を表した「路網整備難易度推定図」と土石流が発生した時に建物への被害の及ぶやすさを表した「土石流災害リスク評価支援図」で、これらの情報を重ねることによって適地を選ぶ上での判断材料になるとした。

白田さんは「地図は災害リスクを低減させるだけでなく、路網整備にかかる労力や時間の削減につながる」と述べた。国産黒トリュフの人工栽培のための技術開発などの成果発表もあった。(金田侑香璃)

発表する白田さん=関市で



災害リスク 一日瞭然



災害に強く、林業用の作業道を整備するのに適した場所が分かる地図=県庁で

豪雨が増加傾向にあり、土砂災害の発生リスクが高まっている中、白田寿生さんが発表した2種類の地図を利用することで、林業の効率化に期待がかかる。

地図は国立研究開発法人森林研究・整備機構の森林総合研究所(茨城県つくば市)との共同研究

で、全国で初めて作成した。空撮して測量した地形データや既存の道路データを活用し、道路設計をシミュレーション。傾斜や崩壊リスク、民家までの距離などを色分けし、災害リスクの高さが一目で分かるようにした。

森林組合や企業は、林道に接続する細い道を山中に造り、木の運搬などを行うが、急傾斜の場所や水の集まりやすい場所に道を整備すると、災害時に土砂でふさがれたり、道の脇に固めた盛り土が崩

れて災害を引き起こしたりしかない。これまでの、現地で測量してふさわしい場所かを判断していたが、道の設計と地形の見極めには豊富な知識と技術力が必要。測量後に候補地を選び直すこともあ

る。 今回の地図を活用すれば、リスクの低い候補地を容易に探せるほか、リスクの高い場所にある道の補強など、既存の作業道の保全の参考にもなる。

他地域の地形のデジタルデータに、今回の災害リスクの評価方法を適用すれば、県外での応用も可能。白田さんは「安全な道が整備されることで、森林管理の効率は上がる。全国に先駆けたモデルが広がってほしい」と話す。

(井上京佳)

「安全な道で管理効率上がる」

岐阜県森林研究所ホームページ掲載期限:令和7年7月23日

この記事は中日新聞社の許可を得て使用しています。